

# 県内唯一てんかん診療に特化

## 生老病支 ひょうごの現場から

てんかん治療に特化した兵庫県内唯一の「てんかんセンター」が昨年5月、神戸大病院（神戸市中央区）に開設された。国の事業に基づき、県の「てんかん支援拠点病院」への指定を受けて整備され、電話相談から最新の検査や外科手術まで幅広く対応する。同センターの機能や最先端の研究などについて、松本理器センター長(54)に聞いた。

(勝浦美香)

### 神戸大病院に支援拠点開設



100人に1人

手足を動かしたり、思考したり、言葉を発したりといった人間の営みの全ては、脳細胞の電気活動から生じる。脳細胞が過剰な電気活動を起こすことで、けいれんする、意識を失う、などの発作が現れるのがてんかんだ。

てんかんは、脳全体に過剰興奮を起す性質がある場合に起こる「全般てんかん」と、脳の一部に生じた何らかの傷が原因となる「焦点てんかん」の2種類に分類される。

患者全体の6〜7割は適切な薬を服用すれば発作を抑えることができるが、効果が十分でない場合、外科手術による根治、緩和療法を検討する。有病率は100人に1人と言われ、「推定では、国内に100万人、兵庫県には5万人の患者がいるとされる」と松本センター長は解説する。

高齢者にも増加

てんかんの治療を巡っては、脳神経内科、脳神経外科、小児科や精神科などが担った



### 電話相談から外科手術まで幅広く

め、どこが専門科なのか分かりづらく、包括的、横断的な診療体制を整えることが課題となっている。

このため、厚生労働省は2018年から、各都道府県に1カ所ずつ、支援拠点病院を整備する事業に着手。兵庫県では神戸大病院が選定され、兵庫の「てんかん診療の最後の砦」と位置づけられる同センターの開設につながった。

てんかんは全てのケースで外科手術ができるわけではない。同センターには、発作時の映像録画と脳波測定を同時に行い、手術への適応の有無を調べるのに有効な「長時間ビデオ脳波モニタリング検査」をはじめ、さまざまな検査機器がそろそろ。従来は県外でしか受けられなかった本格的な検査が可能になったこと



センターの電話相談は昨年12月に開設された。総合相談窓口の案内板にも表示されている

もあり、開設から昨年12月までに180人の新規患者が同センターを受診したという。

「てんかんは、以前は子ども、若者に多い病気だったが、最近は「極化している」と松本センター長。脳卒中や認知症で脳の神経細胞が傷み、高齢者が焦点てんかんを発症するケースも増えているという。例えば、話しかけても返事がない▽無意識に口をもぐもぐさせる▽などは、焦点てんかんの発作でよく見られる症状だ。

「てんかんはけいれん」というイメージが強いが、意識が曇るだけの発作もある。自動車事故などにもつながりかねないので、一時的にそうした症状が現れることがあれば、かかりつけ医を通じて、センターの外来を受診してほしい」と呼びかける。

#### 脳機能をマッピング

松本センター長は、00年から2年間、米国に臨床留学。その際に開発した検査法が現在、同センターを含む世界各

地の臨床現場で活用されているという。てんかんの焦点（震源地）を切除する手術では、言葉や運動といった機能をつかさどる重要な部位ではないことを確認しなければならぬ。そのため、患者の脳に小さな電流を流し、その時の体の反応を観察して、脳機能の地図をつくり、機能の温存を図りながら手術を行う。

松本センター長は留学中、この手法を応用して、より微弱な電流を用いて脳の領域同士のネットワークを可視化する研究を始めた。言語など脳の高次機能は、領域同士が神経線維でつながって、有機的に働くことで営まれる。高次脳機能を温存するために、研究を通じて開発した手法でネットワークを特定する検査がその後、世界的に広まった。

現在、より体への負担が小さい方法で、脳の高次機能ネットワーク地図をつくる共同研究をフランスの教授らと進めているという松本センター長は「脳は未解明の部分が大きい。こうした取り組みが、脳の基礎研究に生かせれば、てんかん治療にも還元できるだろう」と話している。

てんかんセンターは火、水、木曜に無料の電話相談を実施している。希望者は、神戸大病院の代表電話(078・382・5111)から予約が必要。

#### 「生老病支 ひょうご」の現場から

「生」「老」「病」を巡る医療の話題や、前を向いて「支」え合う人たちの取り組みなどを紹介します。